学界時評

中古

山本登朗

本年初頭、中野方子『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』（1月・笠間書院）が刊行された。「紀貫之の歌語と漢詩文」を主なテーマに重ねられてきた研究の集大成だが、その他に、小町の歌や『枕草子』に見える「走り火」の語の背後に漢語「走火」の存在を指摘するなど、仏教語についての論も注目される。和漢比較文学隆盛の中で比較的遅れていたこの分野については、石井公成によって「『紫式部日記』と『源氏物語』における『維摩経』利用」（『駒澤大学仏教文学研究』8　3月）など多くの成果が示されており、その集大成も待たれる。当時の仏教が、現代人の予想を越えた広汎な影響力を持つ、ひとつの文化だったことが、いまあらためて明らかになりつつある。

井実充史「鎮護国家と梵門詩―『文華秀麗集』「梵門」を中心に―」（福島大学教育学部論集77　16年12月）は、中国の集にない部門「梵門」が勅撰集に設定された意味を問い、国家と仏教の問題から『文華秀麗集』同部の具体的な創設意図にまで及んでいる。阿部方行「古今集の贈答歌―構造と性差の規範―」（『紀要東海大学菅生中学校・高等学校』4　3月）は、「『古今集』という組織体」中の贈答歌の位置づけを論じ、勅撰三漢詩集における贈答唱和形式の隆盛との関連をも探る。詩集や歌集をひとつの作品と見てその構成を考えることは常に重要だが、『古今集』についてもその種の新しい考察が求められる時期に来ているのではないか。なお、新間一美をはじめ故小島憲之の学統につながる十二名の共著『新撰万葉集注釈　巻上・一』（2月・和泉書院）や、徳原茂実『古今和歌集の遠景』（4月・和泉書院）には、『古今集』和歌を新しい視点から捉え直す見解も多く含まれており、今後の論議が期待される。

今年は、古今集一一〇〇年・新古今集八〇〇年の記念の年。『文学』（5・6月号）は『古今集』の特集号だが、収載論文の過半が享受を論じたものである点が印象的だった。その中、大谷節子「中世古今集と能―相生の秘義―」は、世阿弥が「時に、原典からも、当時の注釈からも離れた解釈を敢行し、自らの作品世界を構築している」ことを指摘し、「能『高砂』自体が、一つの古今注の姿と見ることもまた可能であろう」と述べる。古注から能への影響の指摘はすでにさまざまになされているが、王朝文学が後世に受け継がれるうえで能のはたした役割がきわめて大きかったことを考えれば、大谷の見解は今後さらに重要な意味を持つことになると考えられる。

『国語と国文学』（5月）は、「平安文学研究の展望」の特集。さまざまな「展望」が示される中で、室城秀之「地券のゆくえ―『落窪物語』の会話文―」は、自らの作業体験をもとに、会話文の範囲認定の問題について論じる。会話文とは何かという文体論的問題や、物語の音読という古くて新しい問題とも関わりうる、重要な問題提起として受け止めたい。また、佐藤道生「江註と私註―『和漢朗詠集』註釈の視点―」は、特に大江匡房の注によって『和漢朗詠集』が「朗詠の台本から文学の書」へと転換したことを述べる。『和漢朗詠集』のその後の影響の大きさを考えれば、本論の指摘の意味は大きい。「句題詩の詠方と和歌の題詠の方法」の関わりなど、今後の課題

とされている問題の解明にも期待したい。なお「江註」については「朗詠江註の視点」（『日本文学』7月）に、同氏による詳細な続論が示されている。

本誌（4月）では、「平安時代の文学とその臨界―いま何をしようとしているか」という斬新な特集が組まれ、話題性豊かな論が並んだ。三木雅博「〈継子いじめ〉の物語と中国文学―『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために」、平野由紀子「私家集研究のフロンティア―道長と栄花物語」、工藤重矩「紫式部集解釈のあゆみ―五五・五六番歌を例として」等は、熟練した筆者による一歩踏み込んだ問題提起として特に興味深い。工藤論文の末尾には「我々はいつも自問しなければならない、〈それは本文のどこに書いてありますか〉と」と記されている。文学研究者は常に、本文そのものに立ち戻ることを忘れてはならない。

工藤論文も指摘するように『紫式部集』について最近特に議論が高まりつつあるが、山本淳子『紫式部集論』（3月・和泉書院）は、同集を「紫式部自身が……精緻な工夫をこらして編集した」作品と見る立場から捉え直し、新鮮な読解を提示しようとしている。『和泉式部日記』について発表される論文も多いが、高木和子「『和泉式部日記』の物語的虚構化の方法」（『日本文芸研究』56巻3号　16年12月）は、「従来ともすると、女の心情の動きに還元して説明されがちであった様々な事象」を「戦略的な虚構の方法」として理解することを試みており、こちらも斬新な視点が注目される。また、武田早苗「和泉式部続集五十首和歌をめぐって―和泉式部日記と五十首和歌と―」（『相模女子大学紀要』68A　3月）は、成立についての試論の一部をなす考察。今後の展開が注目される。

清水婦久子「源氏物語の巻名と歌語」（『百舌鳥国文』16　3月）は、既発表の論をさらに展開し、本文と巻名の同時成立を主張する。外山敦子「〈母〉たちの浮舟物語―競り合う二人の召人―」（『物語研究』5　3月）は、物語の主人公に特徴的な「母の不在」とは対照的な、「母の過剰」という点に、浮舟物語の性格を見る。

近年、「歌ことば」という視点から物語などを考える論が多いが、時に、流行に乗った浅薄な議論も見られる。和歌だけに限った論だが樺沢綾「歌語『する』の表現空間―万葉から新古今へ―」（『武庫川国文』65　3月）は、「新古今時代の歌に新たな空間表現を創造する鍵語」となった「する」の語について『万葉集』以来の変遷をたどった好論。散文の表現研究も、この種の考察をふまえることが必須であろう。

同じ『武庫川国文』掲載の増田繁夫「平安朝の名所絵屏風と屏風歌―白沙青松の風景―」は、名所絵屏風の考察から、白沙青松の風景が持っていた仙境としての意味を追求した、奥ゆきの深い論。さきにも取り上げた『文学』（5・6月号）収載の川村晃生「古今集・歌枕の現在―破壊される現場―」は、そのような「名所」が次々と破壊される現状を紹介し、目先の利益に代えられない景観の重要性を訴える。川村をはじめとする多くの人々の問題提起によって、「いやし」が国民的課題とされる現代社会の中で、「歴史的景観」という言葉は次第に市民権を得つつある。古典文学の将来にも深く関わる問題として注目したい。

―関西大学教授―

時評担当

上代	青木周平氏
〃	毛利正守氏
中古	原岡文子氏
〃	山本登朗氏
中世	徳田和夫氏
〃	渡部泰明氏（次号）
近世	飯倉洋一氏
〃	田中康二氏
近代	高橋博史氏（次号）
〃	松本常彦氏
国語	小野正弘氏
〃	近藤泰弘氏